

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区 名 淀川区
学校名 十三小学校
学校長名 石崎 厚史

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・十三小学校では、第6学年 24名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語科は、平均正答率が61%で、全国平均を5.8ポイント下回り、無回答率は2.1%だった。内容別では、「読むこと」の領域で全国を5.7ポイント上回ったが、「情報の扱い方に関する事項」の領域では、全国を21.9ポイント下回った。評価の観点別では、「知識・技能」が全国を14.2ポイント下回り、「思考・判断・表現」は全国を2.6ポイント下回った。問題別では、「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかを見る」問題では、全国を14.3ポイント上回ったが、「情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかを見る」問題では、全国を21.9ポイント下回った。

算数科は、平均正答率が54%で、全国平均を4.0ポイント下回り、無回答率は2.9%であった。領域別では、「データの活用」の領域で全国を、0.2ポイント下回った。評価の観点別では、「知識・技能」が全国を3.4ポイント下回り、「思考・判断・表現」が全国を5.4ポイント下回った。問題別では、特に「平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかを見る」問題では、全国を12.3ポイント上回った。しかし、「『10%増量』の意味を解釈し、『増量後の量』が『増量前の量』の何倍になっているかを表すことができるかどうかを見る」問題では、全国を17.4ポイント下回った。

理科は、平均正答率が60%で、全国平均を2.9ポイント上回り、無回答率は0.7%であった。領域別では、「生命」を柱とする領域で全国を15.6ポイント上回り、「粒子」を柱とする領域で全国を11.2ポイント下回った。評価の観点別では、「知識・技能」が全国を3.5ポイント上回り、「思考・判断・表現」は全国を1.4ポイント上回った。問題別では、「発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかを見る」問題では、全国を14.5ポイント上回り、「水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかを見る」問題では、全国を23.0ポイント下回った。

質問紙では、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の問い合わせに対する最も肯定的な回答は79.2%で、全国を2.2ポイント下回った。

「自分には、よいところがあると思いますか」の問い合わせでは、最も肯定的な回答が70.8%で、全国を23.5ポイント上回った。

「学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることはできていますか」の問い合わせに、最も肯定的な回答が45.8%で、全国を4.9ポイント上回った。

「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の問い合わせに対する肯定的な回答は87.5%で、全国を7.2ポイント上回った。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

[国語]

内容別における「読むこと」（思考・判断・表現）がよくできていた。目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけることができていると考えられる。しかし、「情報の扱い方に関する事項」（知識及び技能）について課題がみられた。情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことを大切にしていく必要がある。

[算数]

領域別における「データの活用」（思考・判断・表現）がよくできていた。伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見いだし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できていたと考えられる。しかし、「変化と関係」（思考・判断・表現）には課題が見られた。日常の事象について伴って変わる二つの数量の関係に着目して考察することを改めて大切にしていく必要がある。

[理科]

区分別における「生命」を柱とする領域（思考・判断・表現）がよくできていた。発芽するためには必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができたと考えられる。しかし、「粒子」を柱とする領域（知識及び技能）について課題がみられた。水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解することを大切にしていく必要がある。

質問調査より

いじめに対する意識には、これまでの日々の取り組みの成果により高まっている。しかし、一部まだ意識が十分でない児童もあり、更なる取り組みの徹底と継続が必要である。

児童の自己有用感や自己肯定感は、体験的な活動や縦割りでの異学年交流等の活動が実施できるようになったこともあり向上した。

昨年度の課題を受け、探究の研究を中心として、学びのめあてをもち、見付けた課題をよりよく解決していくために、他者と協働して多様な考えを認め合ったり、考えを深めたりすることで、主体的に学ぶ児童を育成するというテーマで授業改善がなされた結果、児童の意識にも反映され、一定の成果が得られたと考えられる。

今後の取組(アクションプラン)

- ・探究をテーマとした児童主体の学びを展開することに重点を置き、学校の全ての教育活動の核として、学ぶことを喜びと感じ、自他の考えを大切にしようとする意識を高める。
- ・児童のそれぞれの課題に合わせて体験的な学習の内容を計画し、明確な目標を持つことができるようすることにより、児童の自己有用感や自己肯定感を高める。
- ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立を図りながら、基礎学力の定着やＩＣＴ機器（一人一台学習者用端末等）の活用を進めることで、児童の資質・能力を育成し、自己実現につなげることができるようとする。
- ・乱立する情報について、データが意図する内容を読み取り、必要な情報が何かを取捨選択し、表現することができる機会をあらゆる学習場面で充実させ、総合的読解力を育む言語活動を展開する。